

# ハスモンヨトウの防除対策

～ほ場ごとの薬剤効果に注意！～

和歌山県農業試験場

ハスモンヨトウは、野菜・花き類を広く加害するチョウ目害虫である(図1)。2024年秋季、紀北、紀中地域の露地野菜でハスモンヨトウの多発が確認され(図2,3)、2025年には御坊市の施設ピーマンにおいてジアミド系殺虫剤の効果の低下が疑われる事例が発生した。これらのことから、農薬の効果低下により多発が生じた可能性が疑われた。そこで、紀北、紀中地域の個体群について薬剤感受性を調査した。



図1. ハスモンヨトウ老齢幼虫、ピーマン食入痕



図2. 10月中～下旬の露地栽培野菜におけるハスモンヨトウの発生推移(2010～2025年)

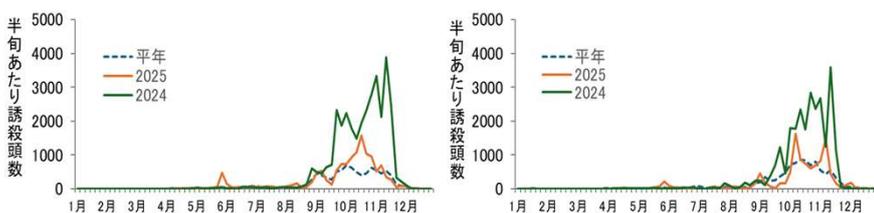


図3. フェロモントラップによるハスモンヨトウ誘殺数推移(左:和歌山市、右:御坊市、2024-2025年)

## 1. 薬剤感受性検定の方法



図4. 供試したハスモンヨトウの採集地点



図5. 採集個体の発生状況

井口(2003)による食餌浸漬法(図6)

1. パクチョイ(アブラナ科)のリーフディスクを製作
2. リーフディスクを所定濃度の薬剤に浸漬、風乾(薬液に展着剤グラミン0.2%加用)
3. リーフディスク2枚に2齢幼虫5頭を放飼
4. 各区6反復 25°C、16L8D条件に静置
5. 3,5,7日後の生死を確認
6. 補正死虫率(Abbott,1925)により効果判定



図6. リーフディスクの調整と検定試験の実施状況

各地点卵塊または幼虫を採集(図4,5)。採集後は人工飼料(インセクタLFS)を用いて累代飼育し、1～2世代目の2齢幼虫を供試

$$\text{補正死虫率(\%)} = \frac{\{\text{無処理区生存率} - \text{処理区生存率}\}}{\text{無処理区生存率}} \times 100$$

## 2. 結果と防除対策

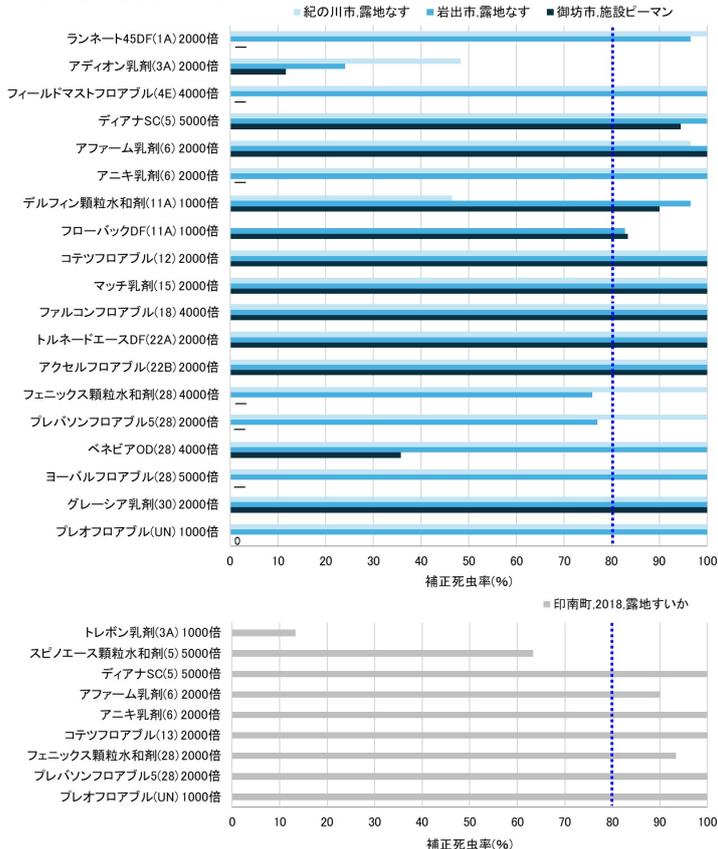


図7. ハスモンヨトウ2齢幼虫に対する薬剤感受性検定7日後の結果(上:2025年紀の川市、岩出市、御坊市、下:2018年印南町)

農薬名に続く( )内はIRACコード  
 図中の“-”は未実施、“0”は補正死虫率0%  
 処理7日後の補正死虫率が80%未満の場合、感受性が低いとした

表. 薬剤感受性が低かった個体群の一覧

成分分類	農業名	個体群
ピレスロイド系(3A)	アディオン乳剤	2025紀の川市、岩出市、御坊市
	トレボン乳剤	2018印南町
スピノシン系(5)	スピノエース顆粒水和剤	2018印南町
BT剤(11A)	デルフィン顆粒水和剤、フローバックDF	2025紀の川市
	フェニックス顆粒水和剤、プレバソフロアブル5	2025岩出市
ジアミド系(28)	フェニックス顆粒水和剤、プレバソフロアブル5	2025岩出市
	ベネビアOD	2025御坊市
作用機構不明(UN)	プレオフロアブル	2025御坊市

◎複数の薬剤に対し感受性の低いハスモンヨトウがどの地点でも発生しています(図7,表)。

◎薬剤の効果低下が疑われる場合は、図7を参考に効果の高い薬剤を使用するとともに、同一系統の薬剤の連用を避けてください。

◎薬剤の効果は、中～老齢幼虫では若齢幼虫よりも低下します。若齢幼虫期の防除を徹底してください。

◎薬剤防除以外の防除対策を併せて実施してください。

- ・作物の残さの処分
- ・ほ場内や周辺の雑草の防除
- ・(施設)防虫ネットの被覆や防蛾灯(黄色・緑色灯)の夜間点灯
- ・卵塊や幼虫を見つけ次第捕殺